

「チームメイト・恩師と過ごした時間」

福島県いわき市立磐崎中学校

三年 柳 澤 諄

俺に回してくれ。試合は最終回である七回裏二死二塁三塁。私は、祈る想いで前の打者であるチームメイトのY君に声援を送っていました。

今年の夏はこれまでに経験したことのない暑さで、この日もグラウンドの気温は三十八度を超え、疲労も重なり試合終盤は意識も遠のくほどでしたが、あの瞬間だけは鮮明に覚えています。額から噴き出す汗が頬を伝わりバットを握る手に滴り落ちて、何度もスボンで手の汗を拭きながら、Y君が私に必ず打席を回してくれることを祈ったあの数分。Y君が打ち取られれば、ここで中学校での野球は終わってしまう何とも言えない苦しさ、終わってたまるかという沸き立つ闘志が入り乱れ、ただ心から奮い出した声を送っていました。

Y君の必死に打った打球は、相手の三塁手の前に転がり、必死に一塁に走るY君の後ろ姿と三塁手の一塁への送球がコマ送りのように見えました。一塁審判の右腕が無情にも振り上げられ「アウト」の甲高い声が聞こえた瞬間、瞼を閉じ、夢であってくれと願いましたが、ゆっくりと瞼を開けると、無情にも残酷な現実がそこにはありました。最後のバッターになってしまったY君は立ち上がることもでき

ず、ただただ声にならない嗚咽を漏らしながらグラウンドの黒土を握りしめていました。

私は、チームの主将としてY君やこれまで苦楽を共にしてきたチームメイトを励ます立場であったにもかかわらず、自分の感情をコントロールすることもできず、しゃくり上げながらその場から動くことさえできずにいました。すると顧問の先生が優しく背中をさすってくれながら、「しつかりしろ。最後までキャプテンらしくチームをまとめなさい。」と声を掛けてくれました。涙は止まることはありませんでした。声は振り絞り、泣きじゃくるチームメイト一人一人に声を掛けていきました。Y君は負けた責任を一身に感じ、最後まで立ち上がることはできませんでしたが、私が声を掛けると次々にチームメイトがY君に駆け寄り、声を掛け始めました。誰もY君を責めることなく、みんなが抱き合いながら悔しさを共有し、これまでの中学野球を思い返し、これで終わってしまったという寂しさも分かち合っていました。

私もチームメイトも汗と泥まみれのユニフォームを着替え、帰りのバスに乗り込むころには、やっと正気に返り、これまで共に過ごした二年数カ月の思い出話に笑顔も出てきました。ふとこれまで厳しくも優しく指導してくださった先生に目をやると、目頭から一筋の涙が流れていました。先生も私たちと同じ、いやそれ以上に負けたことを悔しく感じ、一緒に部活動ができなくなる寂しさを共有してくれていることをその姿から感じました。

これまで三人の先生が顧問として私たち野球部の面倒を見てくれました。いつも厳しく、最初は話しかけるにも勇気がいるぐらいオーラがあったS先生、対照的に野球は未経験でも私たちの身になっていつも優しく気遣ってくれたW先生、若さと元気で

技術的なことや学校生活の相談に乗ってくれたC先生と、見事なまでにタイプが違う先生方と一緒に時間を過ごせたことは何事にも代えがたい財産です。

今になってS先生が叱ってくれた意味が分かったような気がします。でもまだまだ足りないことやっぱり叱られそうですが、厳しく接していただいた時間が愛おしいです。いつもS先生に叱られると目で助けを求めてしまったW先生。いつも困った時ばかり頼ってしまいすみませんでした。もう逃げ道がなくなってしまうと思うと不安なこともあります。いつまでも頼るわけにもいかなないので、もっと強い人間になります。お兄さんのように何でも話せたC先生。一人っ子の私にとってこんなお兄ちゃんがいれば良かったと思えました。

三人の先生、本当にありがとうございました。今こうして振り返りながら作文を書いていても涙がこみ上げてきます。「もっと三人の先生とチームメイトと一緒に野球がやりたかった。あの日をもう一度。」そう考えてしまいます。

「人生は一度きり。もう後には戻れない。」当たり前のことを身に染みて感じます。だからこそ三人の先生方に恩返しするためにも、これからの高校、大学生生活を悔いなく、一日一日を大切に過ごしたいと思えます。どんな時も三人の先生から教わったことを忘れずに。

来春には高校生となります。そして野球部に入り野球を続ける予定です。大変なこともきっと多いと思いますが、私には三人の先生方、そして苦楽を共にしたチームメイトという宝物があります。そんな宝物こそ、これからは私にちからを与えてくれるものに違いありません。